

「伝言はまちがえずに」

新しい指導を考える会

■教材について

本教材「伝言はまちがえずに」(四上)は、「電話」という手段を使って、相手と伝え合う場を設定してある。

「電話で伝え合う」という行為は、相手が目の前にいないため、表情や身振り手振りといった非言語的な要素が使えず、言葉のみで伝え合わなければならない。そのため、自分が伝えたいことをわかりやすく話すように工夫したり、相手が伝えたいことをしっかり聞き取るように工夫したりすることが必要となってくる。

また、「電話で伝え合う」という場合は、四年生の子どもたちにとって、きわめて日常的なものであり、ここで学習したことが、実際の生活の場で生きて働くという点でも、意義深いと考えられる。

■「話すこと・聞くこと」の指導の現状と課題

国語科の学習指導要領において、「伝え合う力」の重視や年間の指導時間が明確に示されたことによって、「話すこと・聞くこと」の実践は、数多く行われるようになってきた。

グループで伝え合う。

第三時…相手を思いやる言葉を選んだり、話す事柄を整理したりして用件を話すとともに、聞いてわかったことを確かめながら、電話で伝え合うことができるようにする。

代表児が伝え合い、モデルビデオと比べて、本時の伝え合いで、どんなことを大切にしたらいいかを話し合う。
グループで伝え合う。

第四時…これまでに身につけたことを生かすとともに、敬語を適切に使って、電話で伝え合うことができるようにする。

代表児が伝え合い、モデルビデオと比べて、本時の伝え合いで、どんなことを大切にしたらいいかを話し合う。
教師が電話をかける側になって、伝え合う。
全体の学習をまとめる。

■一人一人に確かな「話す力・聞く力」を身につけさせる実践事例
留意点① 多様な相手を設定する。

子どもたちが、電話をかけたたり電話を受けたりする相手は、「友達」「家の人」「親戚」「家の人の知人」「一般の業者」など、さまざまである。相手を多様に設定することは、相手に応じた適切な言葉を使うという点や、本教材で学習したことが生活の場で実際に生きて働くという点でも、大切であると考ええる。

しかし、相手の立場になって話したり、相手の考えをしっかりと受け止めたりするという、より良い人間関係を育むための伝え合いになっているとは言いがたい面もある。また、基本話形の形式指導に重点が置かれ、子どもたちにとっての「生きた力」に結びついていないケースもある。さらに、「話すこと・聞くこと」は、音声を中心に行われるので、書いたものとは違って、その場で消えてしまい、評価がしにくいという問題点もある。

このような現状を踏まえ、本教材では、次のような点に留意して指導を行うようにした。

留意点① 多様な相手を設定する。

留意点② その時間で身につけさせたい「話すこと・聞くこと」の技能を明確にする。

留意点③ 実際に伝え合う場を工夫する。

■各時間のねらいと主な学習活動(四時間)

第一時…学習全体のめあてをもつことができるようにする。
電話を使った経験について話し合う。

学習のめあてを作り、学習全体の見通しをもつ。

第二時…メモをもとに、聞き取りやすいように話すとともに、大事なことをメモにとったり、聞き返したりしながら、電話で伝え合うことができるようにする。

代表児が伝え合い、モデルビデオと比べて、本時の伝え合いで、どんなことを大切にしたらいいかを話し合う。
メモの練習をする。

また、電話で伝え合う話題についても、「遊びの約束」「宿題の確認」「お礼」「家の人の知人から家の人への伝言」など、さまざまである。

しかし、本教材では、「大事なことを落とさず、筋道を立てて話す。」「や、大事なことを確かめながら聞き、短い言葉でメモをとる。」「ということが目標に含まれているため、話題は、「相談」や「お礼」など不確定なものではなく、「変更」や「伝言」といった、確定しているものを取り上げたい。

そこで、本実践では、時間ごとに、次のような相手と話題を設定した。

時間	相手	話題
第二時	友達	・遊びの場所と、集合時間が変わったこと。
第三時	風邪で学校を休んだ友達	・明日の時間割と、持ってくるものが変わったこと。
第四時	家の人の知人 (家の人は不在)	・家の人との待ち合わせ時間と、待ち合わせ場所が変わったこと。

第三時には、「風邪で学校を休んだ友達」という相手を設定した。これは、電話をかける側が、単に用件を正確に伝えるだけでなく、「風邪はだいじょうぶ。」など、相手を思いやる言葉がかかることが必要となり、伝え合うことによって、より良い人間関係を育むこともねらいとしているからである。

留意点② その時間で身につけさせたい「話すこと・聞くこと」の技能を明確にする。

(一) 身につけさせたい技能を明確にし、細分化して指導する。「話すこと・聞くこと」におけるこれまでの実践では、「ある一時間で、身につけさせたい技能を理解させ、練習させる。」、「次の一時間で、練習したことをもとに、伝え合う。」といったことが多かった。しかし、このやり方では、ある一時間は理解ある一時間は表現というように、一単位時間の中での理解と表現のバランスが取りにくいという問題がある。また、一単位時間で理解させる技能・表現させる技能が多すぎて、子どもたちに定着しないという現状があった。

そこで、本実践では、電話で「話すこと・聞くこと」において、次の表にある 〃 の技能を、第一時、第三時、第四時に細分化して指導した。

印はその時間の重点項目 〇印は転移できる技能	
身につけさせたい技能	二 三 四
大事なことをメモして話す。	〇
聞き取りやすいように、はつきりゆっくり話す。	〇
大事なことをメモしながら聞く。	〇
聞き取れなかったことは、聞き返す。	〇
相手の思いやる言葉をかける。	〇
何について伝えるのかを、先に伝える。	〇
聞いてわかったことを、自分で繰り返して確認する。	〇
敬語を使って話す。	〇

行い、電話をかける児童の役と評価を教師が行った。

そして、実際の伝え合いを一時間の中で四回行い、どの児童もすべての役割を行うようにした。

(二) 相互評価させる。

冒頭にも述べたが、「話すこと・聞くこと」は音声を中心に行われる。音声は、書いたものとは違って、その場で消えてしまうため、評価がしにくいと言った問題がある。

本実践では、四人のグループで伝え合いを行う際に、電話を受ける児童一名、電話をかける側を評価する児童一名、電話を受ける側を評価する児童一名を位置づけた。この評価をする児童には、伝え合いをしている友達に、技能を意識して伝え合うことができているのか、評価カードを活用して観察し、伝え合いの後に評価・アドバイスをを行うようにさせた。

グループでの伝え合いの際に、評価する児童を位置づけ、相互評価を行わせることによって、その場で評価することができ、伝え合いを行った子どもたちも自分の技能の定着や高まりを意識することができていた。また、評価する側の子どもたちも、単に評価するだけでなく、評価をすることで、友達の伝え合いの良さに触れ、その良さを自分に生かすことができている。

■学習後の子どもの感想

。わたしは、この学習をする前、いつも「伝えときます。」と言ったのに、何を言ったか覚えてなくて、けっきょく伝え

(二) 身につけさせたい技能を明確にするために、展開を工夫する。

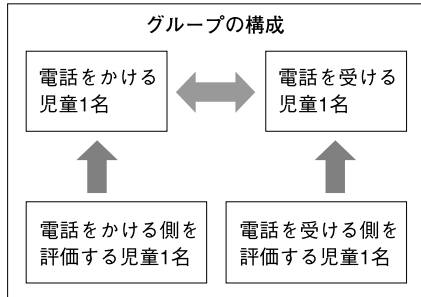
本実践では、一時間の学習の中で、まず、代表児による試しの伝え合いを行い、次に、モデル(ビデオやテープにしたもの)を聞き、代表児の伝え合いとモデルとを比べて話し合っていた。

このように学習を進めることによって、代表児の良さ、十分な点、なぜ、その話し方や聞き方がいいのかが明確になり、その時間で身につけさせたい技能を、子どもたちに気づかせることができた。

留意点③ 実際に伝え合う場合を工夫する。

(一) グループによる伝え合いの場を設定する。

各時間で身につけさせたい技能を明確にした後、グループで伝え合いを行うようにした。その際、グループを四名とした。その構成は、電話をかける児童一名、電話を受ける児童一名、電話をかける側を評価する児童一名、電話を受ける側を評価する児童一名とした。(第四時は、伝え合う相手が家の人の知人であったため、TTによる指導を



られないときがありました。でも、メモのとり方を練習したので、だいじょうぶだと思います。また、かけるときもだれだったらどんな言い方だといったのかも勉強できたのでよかったです。家で電話を使うときに、勉強したことをはつきできると思います。(A)

。この学習をする前は、ゆっくり話すとか思いやる言葉をかけるとか、あんまり考えていなかったけど、学習をして、相手の思いやる言葉をかけると、その相手がうれしい気持ちになることがわかった。あと、メモをするとき、すらすら話せたので、これからメモをして、はつきり話すようにしていきたいです。(B)

。四時間この勉強をして、とても楽しかったです。初めはどんなことをするのだらうかと思っていただけ、やり始めてとても楽しく感じるようになりました。一回、二回と練習していくうちに、とてもじょうずになっていったのが、自分でもよくわかりました。家でも、勉強したことを使って、電話をかけてみたいです。(C)

多様な相手を設定したことで、AやBのように、相手に応じた言葉の使い方を学んだことや、学んだことをこれからの生活に生かしていくこととする姿が見られた。また、身につけさせたい「話すこと・聞くこと」の技能を明確にし、実際に伝え合う場を工夫したことで、このように、繰り返し練習する中で、自分の技能が高まってきたことを感じている子どもの姿が見られた。